

◆特集◆

# ESDからみた

## リノベーション・シヨンまちづくり

名古屋市立大学人間文化研究所 所長 別所 良美

名古屋市立大学・人文社会学部の別所です。本学部・大学院に設置されている人間文化研究所の所長を現在務めています。

先ほどの清水義次さんのご講演を受けて、本学・人文社会学部が推進するESDに対して、「リノベーションまちづくり」がもつ重要性について私たちが考えていることを簡単にお話しさせていただきます。

まず、人文社会学とESDの関係についてお話しします。名古屋市立大学・人文社会学部では、ESDを新しい学部の理念としてカリキュラム改革を行い、二〇一三年度から実



施してきました。

「持続可能な開発のための教育」あるいは「持続可能な社会づくりの担い手を育む教育」を意味するESD (Education for Sustainable Development) は、心理教育学科、現代社会学科、国際文化学科という三つの学科から構成される人文社会学にとって、次世代を

### 1. 人文社会学部とESD

名古屋市立大学・人文社会学部では、ESDを理念としたカリキュラム改革を行い、2013年度から実施してきました。



担う人間の育成、地域社会の協働と福祉の促進、グローバルな共生への貢献という点で、持続可能な社会の担い手づくりを、重要な諸側面で、推進できると考えています。

これまで人文社会学部では、全国ではじめて「ESD基礎科目」を導入し、入学当初から各専門領域での学習をESDとの関連で理解できるようにしてきました。また、それを受けてそれぞれの専門領域において持続可能な未来社会を具体的に展望する授業が行われつつあります。

さらに、教育内容以外でも、二〇一二年度以来、毎年、ESDシンポジウムを開催してきました。今回のESDシンポジウムで五回目を向かえます。二〇一二年度の第一回目が「ESDと大学」、二〇一三年度の第二回目が国際シンポジウム「ESDと大学2」、そして二〇一四年度の第三回目が「中部の『里山資本主義』」、二〇一五年度の第四回目が、日本環境教育学会との共催で、「持続可能な発展とは何かを問い直す」といったテーマでESDシンポジウムを開催してきました。

さて、今回第五回目のESDシンポジウムにおいて、ESDにとっての「リノベーションまちづくり」の意義を考えるに先だって、ESDの意味を再確認しておきたいと思

## 2. ESDをどう理解するのか？

ESDとはEducation for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)の略で、意識としては「持続可能な社会づくりの担い手を育む教育」(文科省)とされています。

そのような「担い手」が持つべき、持続可能性(S)(環境保全)と開発(D)(経済成長・発展)との従来の矛盾対立を克服し、両者を調和させる価値観(E)とは？

タイプ1: 成長否定(脱成長)型

成長(D)を抑制し、豊かさを放棄した生活を強いる価値観の形成

タイプ2: 循環経済(Kreislaufökonomie)促進型

再生不可能な資源・エネルギーと廃棄物を減少させ(S)、同時に生産・富の増大(D)を達成する資源循環型社会を目指す価値観の形成

- (1) 効率戦略: 省資源・省エネ生産、資源生産性の飛躍的向上
- (2) 充足戦略: 富(商品)を享受する消費の仕方の効率化
- (3) 変革戦略: 個別の技術ではなく、社会制度全体を変えて、(1)(2)を促進

循環型社会の実現を目指すESD

います。ESDとはEducation for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)の略で、意識としては「持続可能な社会づくりの担い手を育む教育」とされています。ここで問題なのは、「担い手」はどんな価値観を持つべきなのかということなんです。つまり、持続可能性と開発・経済成長・発展とが矛盾・対立している現在の持続不可能状態を抜け出す新しい価値観とは何かということなんです。

それがどんな価値観であるかに関しては、立場によって解釈がさまざまです。例えば環境原理主義的な立場、近代・反資本主義・反経済成長主義の立場からは、成長・発展そ

のものを否定し、現代の豊かさを放棄すべきだというのがESDの価値観だという解釈もあるでしょう。しかし本学部では、循環経済と循環社会を実現する価値観が実践可能だという立場から、資源循環型社会を目指す価値観をESDの価値観と考えています。この価値観に即した三つの戦略が世界的にも議論されています。

今回のシンポジウムでもESDを「循環型社会の実現を目指すもの」と捉えておきます。

そうすると、ESDにとっての「リノベーションまちづくり」の意義とは、それが如何に循環型社会の実現を促進するかということになります。

「リノベーションまちづくり」についての定義的な説明を引用してみましょう。

「リノベーションまちづくり」とは、「今あるものを活かし、補助金にはできるだけ頼らず、新しい使い方をし、まちを変えること。「人々は」遊休化した不動産という空間資源と潜在的な地域資源を活用して、民間自立型プロジェクトを興し、地域を活性化」させてきました(「豊島区リノベーションまちづくり構想」二〇一六)

この定義から読み取れるのは、リノベーションまちづくりが

1) 第一に、すでに生産され、消費された、今在る資源を新たに「活用」すること、つまり消費を同時に価値創造につなげることであり、

2) 第二に、補助金に頼る「単なる消費活動」を拒否する態度をもち、

3) 第三に、地域資源の潜在的な価値を住民自らが新しく創造する活動である

ということなんです。

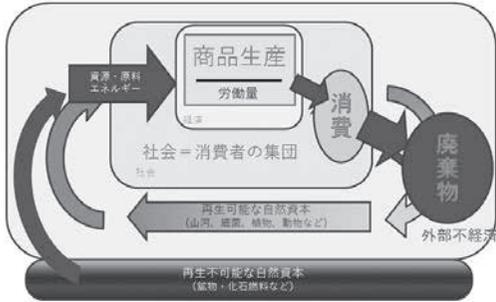
この定義だけからも、リノベーションが「地域資源版の3R..リデュース、リユース、リサイクル」といった循環型社会のスローガンと共通することが分かります。

次に、従来の産業社会に内在する問題を捉え直すことで、循環型社会を実現するには、地域コミュニティの活性化が不可欠だということとを明らかにし、この点からリノベーションまちづくりの意義を考えてみたいと思います。

一八世紀の産業革命以降、産業社会・資本主義社会は、利潤率の上昇を目指し、労働生産性を高めるために常に新しい技術とより多くの地下資源および化石エネルギーを生産に投入することで発展してきました。それが生産量の飛躍的な増大をもたらした、人々の生活を豊かにしたのは

### 産業社会（生産性増大 ⇒ 廃棄物増大）

労働生産性の概念には廃棄物処理コストが含まれない。  
社会は、単に「消費社会」



これまで外部化してきた廃棄物処理コストを、社会と経済は内部化せざるを得なくなり、社会的に生産した富のますます多くの部分が人々の

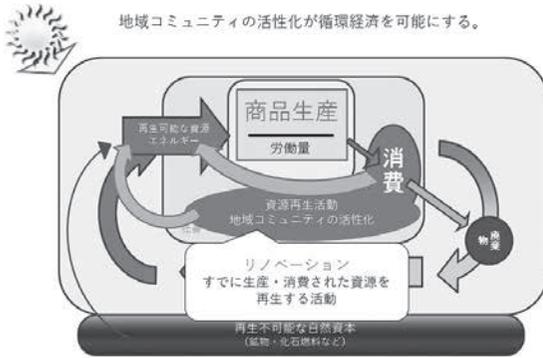
事実です。

しかし労働生産性の概念には廃棄物処理のコストが含まれず、処理は「自然」に委ねられていました。自然は無限であると思われていたわけです。その間に、経済から区別された「社会」は、消費者の集合という意味を強めてゆきました。

しかし「経済システム」の外部に捨てられていた廃棄物は、自然の処理能力の限界を超えると、公害や環境破壊として人間の社会に反作用を及ぼします。

### 持続可能な社会 = 循環型社会

地域コミュニティの活性化が循環経済を可能にする。



生活を豊かにするために利用できなくなり、ますます。それだけではなく、ますます増加する廃棄物は自然と未来世代への負担となります。

これが現在の持続不可能な社会の状態ですが、この行き詰まりを克服する鍵は、社会が、つまり地域コミュニティが、単なる消費者集団であることを止め、存在する資源の再利用・再活性化という価値創造の役割を引き受けることです。消費財の3Rだけではなく、都市・地域資源のすべての再活性化が必要とされ、「社会」が地域資源をリノベーションする主体・主人公となることが重要なのです。

が、リノベーションする地域コミュニティとなることで持続可能な社会が実現できるのです。  
最後に結論です。

「リノベーションまちづくり」とは、「社会」を、「経済」から供給される商品の「消費者集団」から、「地域資源再生」機能を担う地域コミュニティへと活性化させ、循環型社会を実現する試みである。

ここに「リノベーションまちづくり」がもつ、ESDから見た重要な意義があると思います。  
ご静聴、ありがとうございました。